

## 第4回世界創傷治癒学会連合会議 (WUWHS2012 YOKOHAMA JAPAN)開催にあたって

長崎大学 形成外科 秋田 定伯

世界創傷治癒学会連合会議 (World Union of Wound Healing Societies, WUWHS) は4年に一回開催される“創傷”関係では、世界最大規模の国際色豊かな学会です。日本創傷治癒学会には、共催団体 (supporting society) として、多大な貢献を頂いており、この場を借りて改めて感謝申し上げます。

小生は本学会の会員、評議員、広報編集委員でもあります。本年9月2日～6日開催の第4回世界創傷治癒学会連合会議 (通称 WUWHS2012 YOKOHAMA JAPAN) の事務総長も担当しております関係から会員の皆様への本学会のご紹介と開催経緯について書かせていただきます。

WUWHS 学会は4年に一回開催されます。第1回は2000年オーストラリアのメルボルンで、横断的な創傷全般の討議と専門家間の友好を目的に設立されました。残念ながら、日本からは設立委員会に参加しておりませんでしたので、WUWHS の存在や、趣旨について知られておりませんでした。第1回学会期間中に、投票により第2回の開催地が決定し、フランスのパリに決定しました。学会開催者は次の学会までの“理事長”として、引き継ぎと会の発展に努めることなども理事会で決められました。その後2001年イギリス、2002年フランス開催の理事会にて、「WUWHSは創傷を実践する上で、教育、研究、治療を全世界で推進する」などを記載した綱領を発表しております。小生は2002年頃からパリ学会主催者の Luc Teot 教授 (Montpellier 大学形成外科) を始め、関係各位と様々な学会活動を通じて、2004年の WUWHS Paris の準備状況を具に観察しておりました。“創傷”関連の臨床及び研究は非常に幅が広く、各国、地域によって関心や、主な対象が異なっております。教育、ワークショップ、ハンズオンセミナーなどを通じて、知識・技能を高めていく活動が WUWHS を通じて活発に行われておりました。

日本創傷治癒学会を始め多くの日本からの専門家はパリでの第2回学会から参加された方が多かったようです。パリ学会は参加者総数5,500名を越え、日本を初めとするアジア諸国も数百名単位で参加しております。第2回学会開催期間中に第3回の開催予定地を決定する投票会が開催されましたが、当時慶応大学外科に籍を置かれておりました大谷吉秀先生、北海道大学 大浦武彦先生、北里大学 塩谷信幸先生と共に出席しました。アジアからは中国も立候補しておりましたが、結果として第3回開催予定地はカナ



**NEWS  
LETTER**

日本創傷治癒学会

**2012.4  
No.68**

### ●日本創傷治癒学会事務局

〒160-8582

東京都新宿区信濃町35

慶應義塾大学医学部外科学教室内

tel.03-3351-4774

fax.03-3355-4707

e-mail: info@jswh.com

URL : <http://www.jswh.com>

ダのトロントが開催することとなりました。この第3回開催が北米のカナダになったことで、WUWHSの開催地への国際地域への配慮が高くなった印象があります。そこで、第4回開催地を日本にとの意向が高まり、第3回会議期間中の2008年6月6日投票日当日へ【準備】が始まりました。2008年5月下旬に開催地をパシフィコ横浜にすることと、投票会のpresentationを小生が行う事など、実に大まかなことのみを事前に決めて臨みました。候補地は横浜の他に中国(北京)、ケープタウン(南アフリカ)、アンタリヤ(トルコ)があり15分ずつのpresentationと質疑応答の後に投票決定となりました。地理的にはどの候補地も可能性があると思われました。質疑応答の後、電子投票で、横浜32票、ケープタウン20票、北京2票、アンタリヤ0票で、決まりか!と喜んでおりました。が、なぜか司会進行のGary Sibbald先生が



図1:2008年6月6日 第3回世界創傷治癒学会総会での presentation



図2: Yokohama 決定直後の日本代表部 (大浦武彦名誉会長、波利井清紀会長、小生)と WUWHS 前理事長、現理事長

上位2候補地で決戦投票(?)と宣言したため、横浜とケープタウンが決戦投票に進み、2回目には横浜29票、ケープタウン23票と僅少差となってしまいました(図1、2)。

WUWHS2012 YOKOHAMA JAPAN のロゴは Better Care, Better Life です(図3)。高齢化、高度化が進む医療福祉の中で、取り扱う“創傷”も複雑化し一筋縄で解決できないものも多くありますが、患者さん医療者間で、“よりよい創傷ケアを通じて、良い人生・生活”を共に過ごしていきたいものです。

2012年4月4日までは早期事前登録(<http://wuwhs2012.com/jp/registration.html>)で、共催団体である日本創傷治癒学会の皆様への配慮もありますのでこの機会に世界の創傷治療、研究への窓口として WUWHS2012 YOKOHAMA JAPAN への参加をお願い申し上げます。



図3: WUWHS2012 Yokohama Japan ロゴ

## WRRに会員の論文が掲載されました

会員の論文が Wound Repair and Regeneration の Volume20 Issue No.1 に掲載されました。論文名、著者は下記の通りです。

投稿規程に関しましてはジャーナルホームページ、<http://www.wiley.com/bw/journal.asp?ref=1067-1927&site=1> より入手してください。また各巻頭に掲載されております Information for authors をご参照下さい。なお、円滑な審査を行うために、2004 年度よりオンライン投稿を推奨しております。

秋田 定伯 先生（長崎大学医学部 形成外科学教室）

「The usefulness of basic fibroblast growth factor for radiation-exposed tissue」  
P.91～102

## 2012年度 日本創傷治癒学会評議員

【五十音順敬称略】

今年度は以下の 67名が評議員として学会の発展に尽力してまいります。

よろしくお願い申し上げます。（詳細は学会ホームページにも掲載されています。）

\*印は今年度より評議員として就任

赤坂 喜清、秋田 定伯、秋野 公造、浅尾 高行、安藤 暢敏、石田 裕子、磯貝 典孝、  
市岡 滋、井上 聡、井上 肇、猪股 雅史\*、上田 和毅、内沼 栄樹、大島 秀男\*、  
大慈弥 裕之、大野 真司、岡田 保典、小川 郁、小川 令、小野 一郎、加藤 広行、  
貴志 和生、北川 雄光、北野 正剛、木山 輝郎、楠本 健司\*、窪地 淳、熊谷 憲夫、  
桑野 博行、古森 公浩、近藤 稔和、雑賀 司珠也、坂本 長逸、佐藤 道夫、真田 弘美、  
篠澤 洋太郎、島田 光生、白石 憲男\*、調 憲、白水 和雄、須釜 淳子、鈴木 茂彦、  
高木 元、高野 邦夫、高見 佳宏\*、武田 啓、武田 利明\*、竹之下 誠一、館 正弘、  
田中 秀子、田畑 泰彦、塚田 邦夫、徳永 昭、土佐 泰祥、中西 秀樹、中村 哲也、  
西本 聡\*、野口 剛、百束 比古、丸山 優、水野 博司、宮澤 光男、宮本 正章、  
森本 尚樹、吉田 昌、吉村 陽子、和田 則仁

# 腹痛、腹部膨満感に

腹が冷えて痛み、腹部膨満感のあるもの

100

ダイ ケン チュウ トウ  
**ツムラ大建中湯**  
エキス顆粒(医療用)

(薬価基準収載)



- 慢性便秘症患者、過敏性腸症候群便秘優位型などの腹痛、腹部膨満感に効果があります。<sup>1)~4)</sup>
- 米国における無作為化二重盲検試験(健常人)にて、大腸輸送能の有意な促進効果が確認されました。<sup>5)</sup>
- 次の3つの機序による腸管運動亢進作用を示します。
  - 1) セロトニン3型、4型受容体を介するアセチルコリン遊離促進 (*in vitro*, ラット、イヌ)<sup>6)~8)</sup>
  - 2) 消化管運動亢進ホルモンであるモチリンの分泌促進<sup>9)</sup>
  - 3) 腸管粘膜層におけるバニロイド受容体を介した作用 (*in vitro*)<sup>10) 11)</sup>
- 腸管(小腸、大腸)血流量を増加させます。(ラット)<sup>12) 13)</sup>
- 副作用は、間質性肺炎、肝機能障害、黄疸などです。

## 効能又は効果

腹が冷えて痛み、腹部膨満感のあるもの

## 用法及び用量

通常、成人1日15.0gを2~3回に分割し、食前又は食間に経口投与する。なお、年齢、体重、症状により適宜増減する。

## 使用上の注意(全文記載)

1. 慎重投与(次の患者には慎重に投与すること) 肝機能障害のある患者[肝機能障害が悪化するおそれがある。] 2. 重要な基本的注意 (1)本剤の使用にあたっては、患者の証(体質・症状)を考慮して投与すること。なお、経過を十分に観察し、症状・所見の改善が認められない場合には、継続投与を避けること。(2)他の漢方製剤等を併用する場合は、含有生薬の重複に注意すること。 3. 副作用 本剤は使用成績調査等の副作用発現頻度が明確となる調査を実施していないため、発現頻度は不明である。(1)重大な副作用 1)間質性肺炎:咳嗽、呼吸困難、発熱、肺音の異常等があらわれた場合には、本剤の投与を中止し、速やかに胸部X線、胸部CT等の検査を実施するとともに副腎皮質ホルモン剤の投与等の適切な処置を行うこと。2)肝機能障害、黄疸:AST(GOT)、ALT(GPT)、Al-P、γ-GTPの上昇等を伴う肝機能障害、黄疸があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

(2)その他の副作用

| 頻度不明                |                    |
|---------------------|--------------------|
| 過敏症 <sup>(注1)</sup> | 発疹、尋麻疹等            |
| 消化器                 | 胃部不快感、悪心、嘔吐、腹痛、下痢等 |

注1)このような症状があらわれた場合には投与を中止すること。

4. 高齢者への投与 一般に高齢者では生理機能が低下しているので減量するなど注意すること。 5. 妊婦、産婦、授乳婦等への投与 妊娠中の投与に関する安全性は確立していないので、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には、治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ投与すること。 6. 小児等への投与 小児等に対する安全性は確立していない。[使用経験が少ない]

\*その他の詳細につきましては製品添付文書をご覧ください。

【文献】 1)Horiuchi, A. et al. Gastroenterol. Res.2010,3(4), p.151. 2)尾高健夫ほか、消化器の臨床. 2000,3(3), p.338. 3)尾高健夫. 漢方医学.2008,32(3), p.207. 4)日沖甚生. 和漢医薬学雑誌.1994,11(4), p.310. 5)Manabe, N. et al. Am J Physiol Gastrointest Liver Physiol. 2010,298, p.G970. 6)Shibata, C. et al. Surgery.1999,126(5), p.918. 7)Fukuda, H. et al. J Surg Res.2006,131(2), p.290. 8)Satoh, K. et al. Dig Dis Sci. 2001,46(2), p.250. 9)Nagano, T. et al. Bio Pharm Bull. 1999,22(10), p.1131. 10)中村智徳. MEDICAL TRIBUNE. 2003,36(22), p.33. 11)Satoh, K. et al. Jpn J Pharmacol.2001,86(1), p.32. 12)Murata, P. et al. Life Sci.2002,70, p.2061. 13)Kono, T. et al. J Surg Res. 2008,150, p.78.



株式会社ツムラ

<http://www.tsumura.co.jp/>

●資料請求・お問い合わせは弊社MR、またはお客様相談窓口まで。Tel.0120-329-970

(2012年1月制作)

■使用上の注意等の改訂には十分ご留意下さい。 KO-1001 ㊞